

## 会長就任のご挨拶

大 内 善 一

市毛勝雄前会長のご退任を受けて、平成27年9月5日に開催された理事会において会長に選出されました。会員各位のご協力を頂きながら、新事務局員共々本学会の一層の発展のために微力を尽くして参る所存です。

市毛前会長には、平成11年から今日まで16年間にわたって本学会の発展のためにご尽力して頂きました。会長に就任するに当たり、前会長並びに前事務局員の皆様に衷心より感謝を申し上げます。

私どもの日本言語技術教育学会は、平成3年（1991年）に11名の発起人の協議の下で創設されました。初代会長には、学習院大学の波多野里望氏が選出されました。

創設に際しては、波多野氏を含めた発起人諸氏が「なぜ言語技術教育が必要か」を訴えた提案文を執筆しています。これらの提案文の中では、これまでの国語科教育の問題点が摘出され、その問題点を変革していくための実際的な戦略・戦術が述べられています。

また、初代会長の波多野氏が本学会創設に向けた「呼びかけ文」を起草しています。この「呼びかけ文」は発起人諸氏による周到的な検討の下で提案されています。

以上の「提案文」と「呼びかけ文」については、波多野里望編著『なぜ言語技術教育が必要か』（1992年2月、明治図書）に収録されております。本学会創設時の初心に帰る意味でも、これらの「提案文」と「呼びかけ文」とを改めて参照して頂ければ幸いです。

なお、本学会が刊行してきた紀要『言語技術教育』も第25号を数えております。

本学会が創設されてから25周年を迎えたこととなります。この間、毎年開催されてきた大会においては、模擬授業やパネル・ディスカッションを通して国語科授業の改革を目指した様々な提案を行って参りました。

大会開催時には必ず模擬授業を行って、実際の授業の中から目に見える形で言語技術を取り出していこうと努めて参りました。実際の授業の事実を通して言語技術の実体を取り出していくことで、「言語技術」は自ずと明らかになっていくものと考えてきたからです。

この方針は、これからも変わることはないだろうと考えております。

これまでの国語科授業に対しては、理念や手続きだけに囚われていて地に足の付いていない授業、やたらとゴタゴタした着ぶくれした授業が多く見受けられるとの批判

がありました。そこで、私たちは無駄のないすっきりとスリム化された分かりやすい国語科授業を創り出すことを目指して参りました。

とはいえ、旧来の国語科授業の壁はなかなか強固であり、「言語技術」という用語に対するアレルギーもあって、本学会の趣旨が十分に受け入れられて来ているとは申せません。

ところで、「言語技術」についての考え方には、本学会発足の当初から発起人の中でも様々な考え方がありました。

私は、発起人としての意思表示を行った際に、「言語」とは単なる道具ではなく人間の意思と一つに繋がっている「手・足」のようなものであると表明しました。そして、この「手・足」の先を辿ればそこにはその人の心・魂が存在しています。ですから、技術はそれを駆使する人の心・魂と一体なのだと考えたのです。

哲学者の三木清も「技術は魂ぐるみの技術でなければならない」と述べています。

さて、本学会において今後取り組んでいくべき事柄について、この機会に若干の私見を述べさせていただきます。

その第一番目は、これまで同様、模擬授業を通して国語科授業における「言語技術」の実際をより一層捉えやすいものとして提案していくことであると考えています。

授業の実際の場面で「言語技術」の実体が明らかになってくれば、そこから国語科としての「教科内容」も明らかになってくると考えられます。

そこから国語科の「教科内容」としての「言語技術」の必要性を強力に提案していくことが可能となるはずであります。

次に取り組んでいくべきは、「言語技術」を指導していくべき教科書づくりです。

これまでの国語教科書の欠陥に関しては、本学会の発起人の中からも強い批判が加えられてきました。私も国語教科書の読本的な性格に関しては強く批判を加えて参りました。現行の国語教科書では、文学作品や説明文がほとんど丸投げの形で載せられているだけです。教材末に添えられている「手引き」もなお極めて不十分なものです。

国語教科書の「読むこと」の領域に関する教材作成の安易さは、他教科の教科書と比較すると一目瞭然です。算数や社会・理科等の教科書と比べてみて頂きたいと思います。これらの教科書教材は全て書き下ろしです。国語教科書の「読むこと」の教材だけが作家や評論家の書いた作品・文章に丸ごと依存しています。これは教科書の教材としては極めて異例であり異常であるとさえ言えます。こうした教科書は果たして誰のための教科書なのでしょうか。

国語教科書の「読むこと」の教材も「書くこと」や「話すこと・聞くこと」の教材と同じように、教科書の編集に関わる人たちが書き下ろすべきです。

とは言え、この現行の国語教科書の行き方は簡単に改まることはないでしょう。

そこで、代わって新たな国語教科書を本学会が作成していくべきであろうと考えています。勿論、「言語技術教科書」として作成していくことになります。そうすれば、この教科書作成の作業を通して、「言語技術」の実体もさらに明らかになっていくはずであります。

また、本学会では、模擬授業を通して「言語技術」の実体を明らかにしていくべく取り組んで来ております。すなわち、授業の中で「言語技術」を明らかにしようとしてきました。

当然、授業の中では、「教科内容」としての「言語技術」の他に、その言語技術を児童生徒に教えるための「言語技術」（＝言語による教授技術）をも明らかにしていくべきであります。すなわち、児童生徒のための「教科内容」としての「言語技術」と教師の教授技術としての「言語技術」とをセットにして明らかにしていく必要があると考えています。

本学会は、わが国の国語科教育の改革及び発展を自らの課題として担っていこうとする志を抱いた会員によって構成されています。

繰り返しになりますが、会員各位のお力添えを頂きながら精一杯努めて参りますので、何卒よろしくお願い申し上げます。